

2019. 4. 14. 棕櫚主日礼拝式説教

聖書：ルカによる福音書23章32-43節

『自分を救えない主』

受難週の始まりの主日、棕櫚主日を迎えました。今日から一週間、わたしたちは十字架の主を見上げ、十字架という出来事を見つめ、十字架の主の言葉に聞いて、歩んでいきたいと思います。

今朝与えられた聖書箇所はルカによる福音書の23章。ここには、主イエスが十字架にかかる最終的な死刑判決が下されるようす、そして十字架を背負わされ、十字架に磔にされ、死んで、墓に葬られるまで、一気に描かれています。今朝わたしたちが聞こうとしているのは、十字架に磔になったそこでの出来事、言葉です。心を十字架にむけて、聞いていきたいと思います。

主イエスが十字架に磔にされたのはされこうべ(髑髏)と呼ばれる場所でした。主イエスを真ん中に、主の右と左にも一人ずつ犯罪人が磔になりました。

この残酷な刑は公開されていたのです。人々が見ることができた。見せしめ刑だったので。民衆は立って見つめていた。後の48節を見ると見物に集まっていた群衆とあって、まさに人々は見物に来ていたのです。イエスの苦しみ、理不尽な裁判やむごい十字架刑に同情して集まったとは書かれていない。何が起こるのか、どうなるのか、やじ馬として見に来たのです。議員たちも嘲笑っていた。そして兵士たち。これは刑を直接に執行したローマの兵士たち。彼らはイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけ、侮辱してイエスに言葉を投げかけます。そして主イエスに隣りで磔にされていた犯罪人。彼はイエスを罵った。つまりここで、主イエスに対する嘲笑い侮辱が遠いものから始まり、すぐ脇の人で終わる。

議員たちは嘲笑っていった。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがいい。」お前はこれまで他人を救ってきたのだろう。もしお前が本当に神からの救い主で、神の子なら、自分で自分を救ってみろ、そう嘲笑いながら言ったのです。

次に登場する兵士たちは侮辱しながらこう言いました。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」ローマの兵士たちは、ユダヤの宗教的なことなど関心もなければ、知りもしない。ただ、ユダヤ人の王と期待されたこの人物の今の姿は、王としての威厳のかけらもない、みっともない、落ちぶれた姿だと映っている。酸いぶどう酒

を突きつけたのがどんな意味があったのかわからないけれど、意識が朦朧とする中で、気付け薬のように目を覚ませ、痛みをさらにはっきり自覚させようとしたのかも知れません。侮辱と訳されている言葉は、もともとからかい遊ぶ、笑いものにするという意味がありました。

そして最も近い犯罪人。彼は主イエスをののしったという。冒瀆する、神聖なものを汚しごし傷つける、という言葉ですが、ののしって「お前はメシアではないか。救い主ではないか。自分自身と我々を救ってみろ」と叫ぶのです。

議員も、兵士も、犯罪人も、皆同じことを言いました。それは「自分を救ってみろ」、という言葉でした。実に同じ言葉が違う人々によって繰り返されたのです。お前は神から遣わされた救い主なんだろう。奇跡もたくさん起こしてきたんじゃないか。神の子なんだろう。だったら自分を今ここで救ってみろよ。自分を救ってこそその救い主だろう。議員たちは口々に叫んだのでしょ。兵士たちも、お前はユダヤ人の王なんだろう、だったらこんなみっともないぶさまな姿をさらしていないで、今すぐ自分を救ったらどうだ。確かに、議員たちも兵士たちも主イエスは嘲り侮辱した。馬鹿にしたのです。しかし、他人を救ったのだから、神からのメシアなら、自分を救うがよい、という言葉は、単なる嘲りの言葉として済ませることができないのです。わたしたちの心の奥底にある言葉なのではないか。わたしたちももっとわかりやすく、自分が困っている状況で、ここでわたしを助けてくれないのか、ここで、この問題を解決してくれないのか、と思う自分がいるのです。病気になれば病気を癒し、天変地異が起これば、そこで誰も傷つかないような奇跡を望んでいるし、十字架で無力なまま絶命していくような救い主は救い主とは言えないのではないか。スーパーマンは自分の危機をも乗り越えるからスーパーマンなのであって、そうでないなら人は助けられない、そう思っている自分がどこかにいる。議員も、兵士も、なぜ同じ言葉を言ったのか。なぜ自分を救えと言ったのか。救い主とは自分の窮地を救えるものだ、という観念に深く深く囚われているからで、それはわたしも一緒なのです。

犯罪人の言葉は少し違っています。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ」そう言いました。自分を救え、我々も救え、そう言ったのです。犯罪人は自分も磔にされている。だから、群衆や、議員や、兵士とは全然状況が違う。刑の執行中の死刑囚とここで磔になっている。自分も死にかけている。まさに死は目の前。その状況の中で、「自分と、我々を救ってみろ」、と言ったのです。しかしこの犯罪者の言葉は、「救ってください」、ではない。「お願いですから、何とかしてこの窮地を

救ってください」ではない。ののしって言ったということは、救えるはずなどない、とバカにしている、お前みたいな自分も救えない奴に、俺を救うことなんかできない、という絶望している者の言葉です。彼は自分にも、そしてイエスに対しても絶望している。

ところがこの十字架の場所にはもう一人の男がいた。彼は主イエスを挟んで反対側の十字架に磔にされていたもう一人の犯罪人。彼はこう言う。「お前は神をも恐れないのか。同じ刑罰を受けているのに。われわれは自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことはしていない。」二人の犯罪人のうち、一人には見えず、一人には見えていたものがあつた。それは、自分は有罪だが、この人は無罪だ、ということです。自分は自分のしたことによって裁かれている。だがこの人は違う、と言っているのです。どうしてこの人は、このことが分かったのか。十字架の周りで、ほとんどの人が、自分を救え、と叫んだのに、このもう一人の犯罪人は、まったく別のことを見ている。どうしてなのか。与えられた聖書から読み取れるのは、彼が34節の主イエスの言葉を聞いた、ということです。彼は34節の主イエスの言葉に打たれる。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」自分を殺そうとする人たちの赦しを神に祈る。殺そうとする人を憎むのでも、神よ、この者たちを裁いてください、というのでもない。自分を殺そうするもののために赦しを祈る。それは自分を殺そうとする者の罪の深さ、深刻さを受けとめ、その赦しを願う祈りです。殺すものの罪の深刻さに心痛めている者の祈りです。彼らは何をしているかわからないのだ、と祈るのです。そういう祈りは彼の中になかったし、今この時にもない。しかし彼この主イエスの祈りに、自分の知らない場所に立っている人を感じたのではないか。このイエスという方が十字架に磔になっているのは、自分の犯罪や、自分の犯した過ちや、罪のためではなく、人のために磔になっているのではないか。確かにこの人は自分を救えない、救おうともしない。だがそれは救えないからではない。自分で自分のことを救えない人・罪人のために、自分で自分を救えないものとして十字架にかかり死んでいこうとしているのではないか。

彼は主イエスにこう呼びかけるのです。「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください。」御国においでになるとき、という言葉はもう少し別な言い方をすると王としての権威を持っておいでになるとき、ということで、主イエスが十字架で死んで、それ終わりだ、とは思っていないことがよくわかるのです。死んで尚、死に打ち勝って必ず再び、まことの王として権威を持っておいでになる、つまり復活の主を彼は何らかの仕方で、受けとめていた、ということです。よくわから

ないなりに、彼は、このイエスという方が、人のために磔になり、この十字架で自分を殺そうとする者のために祈り、自分を自分では救えない人間のために、そこにまで降り来たっている、そこに自分の身を置いている。そういう方のいることを知ったのです。このイエスという方は十字架から降りないことで、自分で自分を救えない、自分の罪もどうしようもできない、その人間を担い、復活のいのちに包み込む、そのような救い主なのです。

主イエスは彼にこう答えました。「はっきりと言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる。」彼は磔にされて死んでいくさなか、人生最悪の日に、死を突き抜けて、神の約束するいのちの樂園に向かう主の同伴者になった。どんな犯罪人であろうが罪人であろうが、どんな死に方をしようが、人はイエス・キリストによって担われ、いのちの樂園に置かれるのだ、ということを彼は最初に聞く人となったのです。

D a t a : 棕櫚主日 (受難の主日) 礼拝式説教

讃美 : 前291、後297

新生教会礼拝堂